野に満てる清冽の気は我が眼前に限りなく広ごれる。また、かぎなく広ご 雄々しくも気高き情懐もて 偉大なる北溟**** の自然は ごうりて

遊子が胸を今や満しぬゆうしかなか 嶮路遙かに辿り来し

酸なりひょう 々の北風は荒び 華大地覆えど

汚れなき美の世界なれば そは はろかなる。古より の

異邦ゆ憧憬れ集とつくにあるこがのと 愁いを秘めて 若人はひたぶるのかこうど ĺ١ ぬ

篝火は赤く燃えたりホボゥロズ ホボー ダ

仰ぎみるエル 萠え出ん若き情熱は もっぱん 思索胸に楡陵を歩めば
ぉょいむね の影宿 の行路を慕い よ増す静寂 旧す原始の深森より静寂のなかに く ムの梢 に ずぇ

睦っみ 宵いやみ 忘れ得じ若き日の遍歴かりそめの宿にはあれど 彷ょ 徨ょ Eえば夕陽 いまなりません てし真心と友情に はかそけ いくも訪れ の楡陵に

> 願わなん永久の栄えを 斗い苦悩み寮友と語れば などて疾く過ぎ行く二年の春 されど優りて美しき自治の伝統よ ける北国のたくみよ

恵迪の寮故郷の上に

邪悪なる権力は四方に荒びされど視よ我等が周囲を

今ぞ正義の旗を高くかかげんとれば我が寮友よ 腕 むすびて 暴逆の誠は課されんとす 我等が愛し誇らん自治の砦に